

み、ともに伸びていく態度で接する時
その充実が期待されるのである。同時に
また、各学校におけるこうした意欲的
な教師相互の共通理解のうえに立った
協力体制の確立が望まれるのである。

教科指導における

生徒指導

一、教科指導と生徒指導の関係

「きょうは〇〇をやります。」という
教師の一方的な押しつけによる導入や
児童生徒のさまざまな動きなどをいっ
さい無視した学習内容の説明と板書の
連続、このような授業には知識の伝達
はあっても、真の教科指導も生徒指導
もないと言えよう。

教科には、それぞれ教科としての独
自の目標があり、その目標達成のため
の教科指導が行われるが、その教科指
導を直接助ける生徒指導がある。また
逆に、教科指導がよりよく推進される
ことによって、生徒指導の本来の目的
が達成されることになる。

このようなことから、教科指導と生
徒指導を互いに交流させ、補充し合わ
せながら相互補足的な関係を保った学

習指導を行うことよって、はじめて
学校教育がねらっている人間性豊かな
児童生徒の育成が期待されるのである。

二、学習への意欲を持たせる指導

授業に臨む前に、事前研究としての
児童生徒の実態は握、教材研究等の重
要なことは論ずるまでもないが、これ
と並行して、学習への意欲づけを図る
ことも欠かすことができないものであ
る。

学習意欲を引き起こさせる方法とし
ては、一般に、

- 児童生徒の興味・欲求に訴えること。
- 成功感に訴えること。
- 学習目標をよく理解させること。
- 適切な賞罰を与えること。

この中で、学習目標をよく理解させ
ることは特に重要である。学習目標が
教師の学習指導目標としてのみにとど
まっている場合が多いが、これを児童生
徒の学習目標まで掘り下げて指導する
ことよって、学習目的を理解させる。

また、その学習の発展系列をとらえ
せることよって、学習の必要感を自
覚させ、自己実現の意欲に燃えて学習
の目的感と必要感の両面から、積極的
に学習に取り組ませる手だてを講ずる
ことがたいせつである。

三、望ましい学習習慣形成の指導

児童生徒が学習に対して受身の態度
であつては、学習の効率を高めること
は望み得ない。そのために児童生徒が
主体的で積極的に学習に立ち向かう習
慣の形成がたいせつなのである。

望ましい学習習慣の形成の手だてと
していくつか考えられるが、教科指導

の中では、次の二点は重要である。

- 児童生徒自身を自ら学ぶものへと
変容させるようにすること。
- 児童生徒が自主的に考える教科指
導をたいせつにすること。

更に、望ましい学習習慣の形成とし
て、家庭学習に関連した指導もたいせ
つなものである。A 中学校では、家庭
学習を次のような全職員の共通理解の
もとに指導している。

- 学校で示した家庭学習の時間の目
安に迫るようにする。
- 明日の学習事項を明らかにし、予
習を必ずやり通すようにする。
- 知的学習や作業学習への重点のお
き方、また、それに要する時間など
をうまくあんばいして、能率的に実
施できるよう計画する。

- テレビは計画を持って見る。
- 実施後の自己反省を厳しくする。
- このような指導に生徒たちは、
帰ってからなにを勉強すればよい
かがわかつているので、すぐ勉強に
とりかかれる。

- 計画した分は終えようという欲が
出てきて、勉強時間が長くなった。
- 計画的に自主学習ができるように

なった。

- 家庭での勉強が安定してきた。
- 学習のしかたがわかってきた。
という反省をしている。

このように、教師の家庭学習に対す
る指導の役割は大きいものがある。

四、学習不適應についての指導

児童生徒の中には、どうせ、ぼくは
頭が悪いんだ」と最初からあきらめて
学習に臨んでいるもの、引っ込み思案
でわろろうと努力しない無気力なもの
全く無口なもの、周囲の動きに気をと
られる注意力散漫なもの、非社会的な
傾向にあるもの、又は急に成績が下が
ってしまったという児童生徒は必ずい
るものである。このような児童生徒を
「だめな子供」という見方でなくて、
なんらかの教育的措置を講ずること
よって、教科に関心を持たせたり、学
習に意欲を持たせたりすることができ
るという可能性を信じて努力すること
が、生徒指導では大事である。

学習不適應の傾向に陥る児童生徒に
は多くの複雑な原因が考えられる。そ
の児童生徒の持つ能力的なものや性格
的なもの、更には、児童生徒を取り巻
く環境、なかでも家庭環境上の要因が
大きな原因になっている場合が多い。
そこで、これらの児童生徒を、心理状
態、性格、知能、家庭環境、授業時の
態度遊び等、多様な角度からの観察、
調査により多面的に児童生徒を理解す